

# 縁起と赤気 付・関連史料翻刻

片岡龍峰

## 要旨

『兵庫県神社誌』に収録される『天王御影向縁起』については、従来から歴史学者の間では知られていたが、この中の記載「盡夜耀事アリ光只波利ノ如シ」という表現について、日本でも稀に見られるオーロラ、いわゆる赤気ではないかという仮説を立て検証してみることにした。残念ながら同史料は活字に残されるのみで、具体的な検証を果たそうにも活字の域を出るものではない。幸い、関係する『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』を見出したことにより、双方の史料から、先に立てた仮説を検証するとともに、付録として今般見出し得た『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』の翻刻等を添えておく。仮に応安三年（西暦一三七〇年）に赤気があったとすれば、当然他の史料にも見出し得ないかという点も留意した。それが『鳩嶺雑事記』である。こうした史料において、特に数字などが概数として記述される点などを考慮するならば、ほぼ同時期、しかも範囲の広い地域で同様の現象に関する記述が確認しうることから、赤気という可能性を考えうるのではなからうか。本研究は、日本に赤気が見出せる地球物理学の結論を、地域に残る史料から確認しようとするところみであり、人々がどのようにそれを口述したかをも確認できる点でも興味深いとともに、同様の表現はまだまだ確認しうるのではないかという点で、今後の展開の可能性も示した一事例として位置付けておきたい。



## はじめに

日本の古典籍には、オーロラの目撃例が度々記録されてきた。その代表的な例として、藤原定家の『明月記』には、建仁四年（西暦一二〇四年）正月十九日の日記中に、次のように記されている。

秉燭以後、北井良方有赤氣。其根ハ如月出方、色白明、其筋遙引如焼亡遠光。白色四五所、赤筋三四筋、非雲非雲間星宿歟。光聊不陰之中、如此白光、赤光相交。奇而尚可奇、可恐々々。

（『修訂訓注明月記データベース』による）

「赤氣」という語彙は、古くは『日本書紀』推古天皇二十八年（西暦六二〇年）に見られ、日本最古の天文記録としても知られる（片岡龍峰、山本和明、藤原康徳、塩見こずえ、國分互彦、「雉尾攷―日本書紀にみる赤氣に関する一考察」、総研大文化科学研究十六、17-39、二〇二〇年）。赤氣とは、夜空が赤く発光するという特異な自然現象を指しており、日本でも稀に見られるオーロラの出現を目撃したものと解釈できる。オーロラは、普段は緯度の高い地域のみに見れ、その色も緑が中心というのが一般的に知られていることだが、稀に起こる巨大磁気嵐の際には驚くべきことに日本のような中緯度地域にまでオーロラが現れ、その色も緑ではなく赤が中心となることは現代的な地球物理学の研究において明らかにされてきたことである。そのような巨大磁気嵐は、現代社会においては自然災害の一種でもあり世界的に深刻な停電を引き起こす可能性があることから、防災的な側面からも追究されている。ただし、数

百年に一度の規模の巨大磁気嵐の実態を知り、正しく対策を立てるには、百年に満たない現代的な観測データのみでは不十分なため、古典籍に残された赤気に関する記録のひとつひとつが、磁気嵐に関わる研究者にとっても非常に貴重なデータとして注目を集めてきた（『日本に現れたオーロラの謎』、片岡龍峰著、化学同人、二〇二〇）。このような日本の古典籍に記された赤気を巡る近年の研究成果は市民の関心も集めており、今では様々な関連情報が著者のものに送られてくる。

市民から寄せられた疑問の中でも、令和二年二月に千葉県流山市在住の西上雅朗氏から寄せられた、兵庫県の香住に古くから伝わる「光の事件」はオーロラか否か、という問いについては、直ちに答えられるものではなかった。この問いは、そのまま本研究の問いにつながる。本研究は、この光の事件が記載されている『天王御影向縁起（長福寺所蔵）』に残る影向が赤気ではないか、という仮説を立て、新たに得られた史料と既存の史料とを比較すると共に、同年に確認されている赤気史料に関する科学的な視点を交え考察するものである。

### 『兵庫県神社誌』に伝わる影向

兵庫県香美町の香住区一日市には、日本海を一望できる風光明媚な陸繋島があり、その高台まで長い階段を登った先には、大きな松に囲まれるようにして八坂神社が建てられている。この八坂神社の別当寺を長福寺という。兵庫県全体の神社を調査した『兵庫県神社誌』下巻（昭和十三年発行）には、六十一頁に香美町の八坂神社と長福寺の由来を記した『天王御影向縁起（長福寺所蔵）』（以降、『天王御影向縁起』とする）がある。タイトルに長福寺所蔵とあるが、残念ながら原本は焼失しており、活字が残されるのみである。以下、『天王御影向縁起』の本文を引用してお

こう。分ち書きについては◇で示した。□は理解のための注である。

天王御影向縁起。〈長福寺所蔵〉

但馬國美含郡四月嶋山天王御影向縁起

一應安三年〈庚戌〉秋之比此浦沖百日計盡夜耀事アリ光只波利ノ如シ去程諸人可有何事哉非只事ニトテ上下萬民成怖畏ヲ處當郡竹野郷蘭部切濱之住人濱太郎濱石トテ兄妹有二人妹ノ之濱石女或時無何ト狂亂シ此里ニ遊行シテ狂事五十餘自〔注 狂事五十余日の誤りか。〕然間雖斷食味顔色遂不衰シテ只撰不淨ヲ安産荒薦諸人殊ニ成不審ヲ處然シテ後童女之神託ト云吾ヲハ思何者トカ廣峯牛頭天王也為衆生利益此里エ影向スル去間其瑞□〔注 この欠字箇所は瑞祥か。〕雖令見凡夫苟シテ不知之耶既此海沖久耀事吾影向之光也猶成疑者其不審ヲ可開トテ或松ノ木ニ立寄此木ノ梢ニ吾躰アリト託ス梢ヲ見御正躰一面御座急勸請シ社造可遷宮トノ給テ皆人此時開疑心聊住□□聞之者俄運歩族貴賤門前成市又童女語云吾機縁深厚ノ聖一人アリ當所森垣住人太輔阿闍梨是ヲ吾祝部トスヘシ惣シテ至禰宜神主神子ニ定置テ護法上給ナリ近代殊勝誠無不如之自其以降不云遠近ヲ天王詣ト云事于今不絶自御影向當四十三年開當山建立一院給事雖難計神慮兼可建長福寺于瑞相此所成天王影向給

一當山長福寺始建立事

應永十九年〈壬辰〉二月十六日始之大工〈石津村吉田〉

『天王御影向縁起』の全体を意識してみれば、以下のような内容になるだろう。

応安三年の秋頃、香住の沖に百日ほど夜通し輝く事があり、その光は波利のようだった。やがて、多くの人は「これは何事だろう、ただ事ではない」と言い、誰もが怖れた。切浜に住む浜太郎と浜石という兄妹がいた。妹の浜石は、ある時、何とはなしに狂乱し、この里をさまよい回った。狂って五十日ほどの間、食べずとも顔色が衰えることもなく、ただ清浄の地で荒薦を巻いて座っていた。多くの人は、とりわけ疑わしく思っていた。それから後に、童女の神託を述べて「私を何者だと思っているのか。広峯牛頭天王である。衆生利益のために、この里に影向した。長い間、その瑞祥を見せていたのに、凡人は仮にも分からないのか。既に、この海の沖に久しく輝く事は、私の影向の光である。相変わらず疑っている者は、その疑いを解きなさい。」と言い、ある松の木に立ち寄り、「この木の梢にご神体がある」と託した。梢を見ると、ご神体が一面に座っている。「急いで勧請し、社をつくり、遷宮しなさい」とおっしゃって、人は皆、この時、疑うことをやめた。これを聞いたものは急いで足を運び、身分の高い者も低い者も皆、門前に集まった。また童女が語るには「私に機縁深厚の高徳の僧が一人いる。ここの森垣に住む太輔阿闍梨を祝部としなさい。全て、禰宜・神主・神子に至るまで、護法を定め置いてもらいなさい。」近ごろは、実に格別であり、これを欠くことはない。それより以来、遠近を問わず天王詣ということが今も絶えない。御影向から四十三年にあたり、当山を開き、一院を建立した。神慮は推し量ることはできないが、兼ねてから長福寺を建てるべき瑞相として、ここに天王影向を成し給ったのである。当山長福寺建立の事。応永十九年二月十六日。始の大工は石津村・吉田。

本研究で注目したいのは、冒頭の記述「応安三年（庚戌）秋之比此浦沖百日計盡夜耀事アリ光只波利ノ如シ」である。この記述を信賴するならば、応安三年、つまり西暦一三七〇年の秋頃、日本海に百日ほど光が現れた。この奇瑞の光が影向であり、その影向の結果として建てられた社が、現在の香住の八坂神社、その別当寺が長福寺ということになる。

光が「波利ノ如シ」というのはどのような現象を指すのだろうか。広辞苑（第七版、二〇一八）によれば、波利とは落葉高木のハンノキ（榛木）の古名である。また、精選版日本国語大辞典（小学館、二〇〇六）によれば、ハンノキは「早春、葉に先だつて開花する。雄花穂は黒褐色の円柱形で尾状に垂れ、雌花穂は楕円形で紅紫色を帯び雄花穂の下部につく。」とある。つまり、赤い楊のように垂れ下がる形状の花を咲かせることが特徴的な植物であり、類似の表現として「火柱」とも表現される赤気のことを表現しているとしても不自然ではない。『日本書紀』においては、赤気は「形似雉尾」と書かれており、この表現は中緯度地域で見られるオーロラの特徴的な形状、つまり扇形や扇の一部、を的確に表していると解釈できる（片岡龍峰、山本和明、藤原康徳、塩見こずえ、國分互彦、「雉尾攷―日本書紀にみる赤気に関する一考察」、総研大文化科学研究十六、17-29、二〇二〇年）。赤気の形態に関する表現は、火柱のほか、旗や野火など様々な例が挙げられるが、赤気を表現したのであれば、「波利ノ如シ」とする用例は、この史料に限られる。

令和四年十二月、筆者は兵庫県香美町香住区香住の八坂神社を現地踏査し、代々伝わる祭りにも参加させて頂いた。この調査を通して、社の位置が日本海を北に見渡す松に囲まれた高台にあるということ、枝が地面に届くほど垂れ下がり、盆になると多くの燈籠を吊り下げられていたことから燈籠の松と呼び、伝承されていること、八坂神社の敷地内に立つ昭和四十七年の碑文（図1）には、『天王御影向縁起』を引用する形で、その由来が記されていること、そ

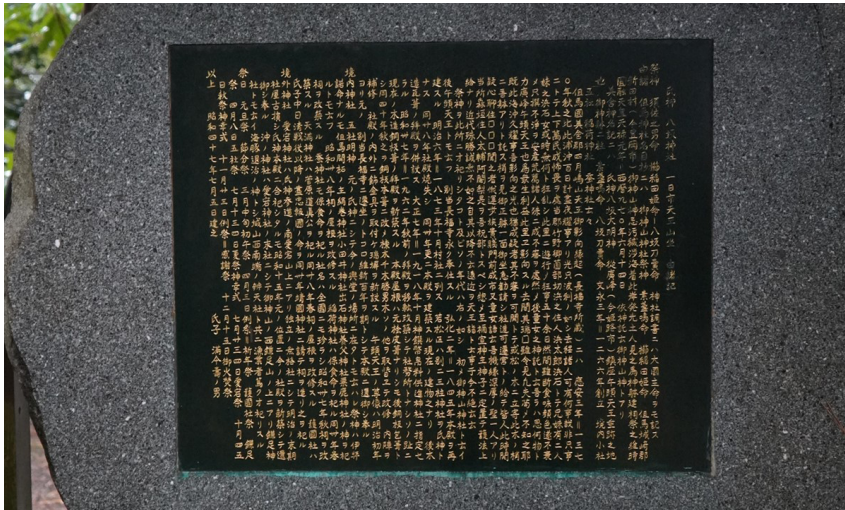


図 1

して火災によって縁起の写本は失われていること、などを知った。つまり、『影向縁起』は活字のみが残る。また、年代は特定されない。

## 『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』に見る影向

香住での現地踏査後、焼失していない手がかりを求めるうちに、江戸時代の卷子本『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』を入手した。『天王御影向縁起』とは異なり、この卷子本の書かれた年代は天保五年に特定される。卷子本の全容は、本研究成果の一環として、国書データベースに公開されたものを参照したい (<https://doi.org/10.20730/100423893>)。『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』には、真言宗における美含郡（現在の香住区）の位置づけ、勢至菩薩とのつながりからはじまり、応安三年の廣峯牛頭天王の影向の話、それから四十三年が経過して長福寺が建てられるまで、が記されている。『天王御影向縁起』との比較で注目したいのは、以下の箇所（図2）である。



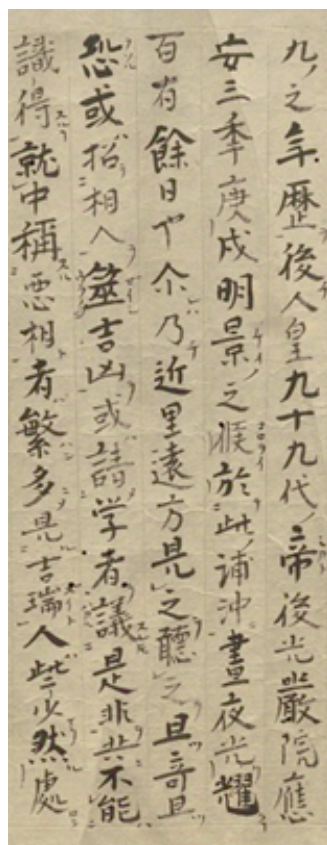


図 2

「応安三年庚戌、明景けいこうの頃、此ノ浦沖に於て晝夜光り耀くこと百有余日也。尔は乃ち近里遠方之を見、之を聴き、且つ奇且つ恐る。或は相人を招て吉凶せうを筮し、或は学者を請じて是非を議すれども、共に識得すること能はず。中就な(なかんずく)、悪相と称するは繁多はんにして、吉瑞ずいと見る人は些少なり。」と訓読してみたが、まず、年月・場所・方向・継続時間の記載については『天王御影向縁起』と共通しているため、同様の発光現象について述べていることは明らかである。以下では、史料間で異なる点や、既に先行研究によつて確定された赤気事例での表現の類似性などに注目して幾つか確認してみたい。

まず一点目として、晝夜、つまり昼夜と書かれている箇所は、『天王御影向縁起』では晝夜、つまり夜を尽して、に対応する。ここは「晝」と「晝」の旧字体の親字性から、いずれかが誤写であろうと推測するが、オーロラが肉眼で確認できるのは夜間に限られるため、オーロラのことを記述していたのであれば、『天王御影向縁起』の「晝夜」が正しい写しであると判断しておきたい。

二点目として、「近里遠方之を見」という箇所は、『天王御影向縁起』にはない記述である。光の現象が非常に広い範囲から目撃された、という空間的に大きな広がりを見せていることは、日本各地から確認できるほどの空間的な広がりを持つオーロラの出現と整合的である。このように、『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』では空間的な広がりを「近里遠方之を見」と表現し、『天王御影向縁起』では「光只波利ノ如シ」と具体的な形状を表現したことは、現象の在り方を捉えるための相補的な情報でもある。

三点目として、「且つ奇且つ恐る」という表現については、先に挙げた藤原定家の赤気の日撃例に見るような、日本人がオーロラを見て恐れ驚く様子を示した多くの赤気の記録と類似している。また「悪相と称するは繁多にして、吉瑞と見る人は些少なり」といった吉凶のくだりにおいて、あるいは吉兆ともする例としては、建部綾足の『折々草』中に、明和七年に京都にも出現した大規模な赤気に関して、西も東も恐れ驚く話を聴くが、加賀だけは違うとして「或翁の、己よく覚えて侍る、是に違はぬ気の侍りし年は、稲善く榮えて、國中豊けく侍りしなり、いと善き事にて侍りしと語りき」といった一例がある。ほかに、人々が凶兆と見る赤気を凶兆と捉えずに戦に出る織田信長に驚いた、との例が、ルイス・フロイスによつて以下のように紹介されている。「當一五八二年の三月八日（天正十年二月十四日）夜の十時に、天は東の方が甚だ明るく、信長の城の最高の塔の上方は甚だ赤く見え、我等に非常な恐怖を起したが、是は朝まで続いた。赤さは甚だ低く、二十レグリの所よりは見ることが出来まいと思はれたが、其後聞いた所に依れば、豊後に於ても是が見えたといふことである。信長が此の驚くべき兆に拘らず、恐るることなく甲斐国の王に対する戦争に出た事は、我等カザに居る者の驚いた所である。」（耶蘇会の日本年報、第1輯、村上直次郎訳註、昭和18年、p159、doi:10.11501/1041119）

四点目として、「之を聴き」にも注目しておきたい。オーロラはほぼ真空状態の宇宙空間における発光現象である

ため、地上で人間が感知できる音波を生じない。そのため、オーロラを表現する言葉として、「之を聴き」というのは物理的に妥当ではない。それにもかかわらず、オーロラの出現とともに音を聴いたという話はよくあることでもあり、オーロラの出現を否定するものでもない。高力種信による『猿猴庵随観図会』(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2537160/1/8>)には、『折々草』の大規模な赤気と同日の明和七年七月廿八日に尾張国でも見られたオーロラに驚く人々の様子が描かれる。この、オーロラと確定している赤気の記述の中にも「高き所に登りてみれば赤気のうちに物の煮ゆる音聞ゆ」と書かれているのである。いずれにしても不思議な記述である。

### 『鳩嶺雜事記』に見る赤気

日本でオーロラが目撃された顕著な事例については、神田茂によって、『日本天文史料』(昭和一〇年発行)にまとめられている。ここから室町時代、特に応安三年の赤気の出現を調べること、『群書類従』(第567-569冊(巻454-456上)、『刊、国立国会図書館デジタルコレクション』<https://doi.org/10.11501/2576271>)中の『鳩嶺雜事記』(イメージ60)に辿り着くことができる。当該箇所を活字にすれば、以下のようになる。

応安三年十月八日戌刻ヨリ赤色ノ氣北ニ当テ天ニ見テ夜半ニ及フマテ有之其躰焼亡ヲ見カ如シ諸人希異ノ思ヲ  
 成了先年嵯峨ニテ見エタリ同十一月六日夜子丑寅刻ニ赤氣北ノ天ニ現ス深赤色先々超過諸人目ヲ驚ス白色黒色  
 等ノ大小ノ筋赤色ノ上ニ南北エ光明ノ如ク現ス希代ノ形色也

『鳩嶺雜事記』は石清水八幡宮の記録である。この記述に従うならば、応安三年の十月と十一月に約一月の間隔を置いて京都の北の夜空に赤気が出現した、ということになる。「焼亡」、「筋」、「希代ノ形色」、いずれもオーロラを形容したものとして自然であるが、約一月の間隔を置いて磁気嵐が発生しやすいこともまた地球物理学ではよく知られていることであり、周期性の磁気嵐あるいは単に二十七日周期とも呼ばれる。地球から見て太陽の一回転は約二十七日であるが、磁気嵐の原因となるプラズマを放出する黒点領域が数か月ほど活動を維持し、太陽の回転と共に再び地球に、その砲台を向ける、という物理的な事情を表している。また、応安三年（西暦一三七〇年）前後は、太陽活動が特異的に活発な時代、つまり巨大磁気嵐が多く発生しやすかった年代であり、世界的に赤気や巨大黒点の記述が多く残されていることが先行研究から知られている (Siscoe, George L., Evidence in the Auroral Record for Secular Solar Variability." Rev., Geophysics, 18:3, pp. 647-658, 1980. <https://doi.org/10.1029/RG018i003p00647>)。そのように太陽活動の非常に活発な時期には、赤気の原因となる巨大磁気嵐や太陽の爆発現象が短期間には収まらず数か月に及ぶものも多いことも近年の研究から明らかになりつつある (Karaoka R., Clustering Occurrence Patterns in Red Sign Auroral Events throughout Japanese History, Studies in Japanese Literature and Culture 6, 119-143, 2023)。これらのことから、『鳩嶺雜事記』の赤気事例はオーロラであることが確定している。

ところで、応安三年という年は一致するものの、『鳩嶺雜事記』にみる十月、十一月の季節は冬であり、場所は京都である。つまり、『天王御影向縁起』や『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』の秋とは季節も場所も微妙に異なる。ただし、仮に『天王御影向縁起』や『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』では「秋の頃」と、ある程度の時間幅を表現し、さらに百日ほどの継続時間を概数的に述べたと捉えるならば、オーロラ発生年月に関する言い伝えのあいまいな季節感を示していたという可能性も考えられる。また、オーロラの見られる地域というのは地球規模で広大である

ため、見られた場所の多少の違い、この場合は香住と京都、については殆ど問題にならない。むしろ、北に見晴らしが限られ、比較的緯度の低い京都からは赤気が見られなかった状況でも、北に日本海が広がるために北方遠方までの見晴らしがあり、かつ北方に現れるオーロラに比較的距離の近い香住からは、京都からは見逃してしまった水平線近くに現れるような赤気事例も目撃できていた可能性は高い。つまり、実際に香住では秋から赤気が目撃され、冬にかかるまでの長期間、何度も赤気が確認されており、そのことを「秋之比此浦沖百日計盡夜耀事アリ」と表現した可能性も考えられる。以上のことから、応安三年の秋から冬の数か月にわたって、実際に香住からオーロラが度々目撃されていたということは地球物理的に自然なことであり、その一例を『天王御影向縁起』や『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』が示していた可能性が考えられるのである。

## おわりに

本研究では、『天王御影向縁起』に記された、香住から北の日本海に見た応安三年のつまり「光の事件」は、赤気、つまりオーロラではないか、という仮説を立て、その仮説について、『天王御影向縁起』と『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』の両方を比較し、さらに、ほぼ同時期の『鳩嶺雜事記』に書かれた京都でのオーロラ出現記録から地球物理学的な考察も加えることで、その仮説を検証してきた。結論としては、この光の事件は実際にオーロラの出現を受けて記録された可能性が考えうるのではなからうか。

寺田寅彦は、その随筆『神話と地球物理学』（昭和八年八月、文学）において、このように述べている。「大國主神が海岸に立つて憂慮しておられたときに「海うなばらを光てらして依より来る神あり」とあるのは、あるいは電光、

あるいはまたノクチルカのような夜光虫を連想させるが、また一方では、きわめてまれに日本海沿岸でも見られる北光オーロラの現象をも暗示する。」実際に、本研究で注目した『天王御影向縁起』や『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』のように、北に見晴らしの確保された日本海沿岸に残る古記録に注目すれば、オーロラを暗示する史料が新たに見いだされる可能性も、まだまだ高いのではないかとも思われ、今後の更なる研究の展開の可能性も期待されるのである。

## 付録

凡例：本史料は縦24 cm、横136 cmの卷子本である。紙の種類は楮紙であり、一行毎に罫線がついている。以下、原文を示すが、改行はそのままとし、翻刻するにあたって一部新字体に改めた。

『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』 (<https://doi.org/10.20730/100423893>)

竊以夫當寺之濫觴者人皇六十一代朱雀院  
之御宇承平二壬辰年仲秋之天照道上人始  
而来自于當郡篠部内歌鷺村建立一之宇精舎  
号称海尻山觀音寺又刻大勢至菩薩之尊像  
為本尊然是上人者元來発無比之大願大  
勢至菩薩之形像三軀、手自制作之奉安置於

日域朝中三箇處一尊者陸奥国玉造郡船木  
里坐廻表東曼荼羅定門之利徳一尊者曰  
向国白許郡村上山在即頭西曼荼羅恵門之  
智徳一尊者但馬国美含郡歌鷺村坐即表彰  
両部不二之奥義定恵一致之密理今當寺之  
本尊是也彼三所亦横堅中台密嚴国土花美  
世界法界宮三部三密理智事三点一々功德等  
恒沙非喻算數難計者乎凡大勢至菩薩者  
神力遍十方悲願亘三世放頂上光明照生死之  
長夜現足下神力示菩薩之本都所似信願  
歸依之輩不举手開仏性之蓮花恭敬供養  
之人不運足遊諸仏之宝刹加之助成諸仏  
之行願勸進衆性之道心此菩薩之本誓彼  
大士慈悲也粵自承平二年既歷四百三十  
九之年歴後人皇九十九代帝後光嚴院応  
安三年庚戌明景之頃於此ノ浦沖晝夜光耀  
百有余日也尔乃近里遠方見之聴之且奇且  
恐或招相人筮吉凶或請學者議是非共不能

識得就中称悪相者繁多見吉瑞人些少然處  
当郡竹野郷園部浜内切濱村住人濱太郎妹  
濱石女云者卒然狂氣豈奔古郷徘徊此里  
既及兩月是狂人異于尋常狂者久雖絶食味  
遂不變色徒似吐言語敢無毀人惡穢汚不  
至濁室好清淨安座荒薦或時狂女称神託  
告閭人曰我者廣峯牛頭天王也為擁護衆  
生雖來臨此里凡夫愚昧不覺知之可悲  
可悲項數日放光於海上者偏是吾影向之光  
明也。今當教吾躰知其處在也舉一指示彼  
即見指方果御正躰一面歷然掛松梢此時諸  
人開疑解惑了肆即造社納神躰初祀備供物  
且復天王託宣當郡森垣住人太輔阿闍梨可  
為我祝部惣至于禰宜神主神子選其器任  
其職宣專祭祀也云々自尔以降恒例之神事  
無闕如之在之禮典不怠特年内一度之祀者近  
郷之男女如雲萃而崇敬遠境之縉素霧  
如合以譬仰是故神者日々増威光人者時々得



利生随而牛頭天王者世曰蠶養神也既而

自天王御影向四十三年之後応永十九年壬

辰卯月八日自歌鷺村引越一日市邑改海尻

山觀音寺号卯月嶋山長福寺此時之院主

覺成法印即前神託之祝部是也于茲覺

成有伽羅修宮之志欲求良材之処幸或

同年九月廿四日戌刻漢土大船漂随風波

流寄此浦遂乃用彼船道具充此堂材木次

又欲造立一塔姿之節同年号廿五年八月廿六日

賊風頻吹驚汰遽起北国之樽船及破損寄

此浜以彼樽葺塔畢右大願主者長左兵衛

尉長谷部信連九代之後胤加賀守忠連

道号傑叟法名宗俊也至于堂塔寺院為功

近之棟梁遂造功之成就者石津邑吉田云工人

也堂塔供養者同年号廿六年七月二十四日修之也

舞樂曼荼羅供職衆十二口長福寺法花寺

糸谷寺長谷寺觀音寺宗光院宝藏坊

大美坊南之坊奈本坊西谷坊東之坊也此

時之導師者覺成法印也云々抑當寺之縁  
起先徳記之直取其言実姑捨其詞之花予  
今雖書改之頗准右記非好文之玉藻無執  
字之秀逸而已

歲次甲午天保伍星八月吉日良辰 謹言

真言陀尼宗 祐海快道 行年廿四才

於棕橋山遍照密室 書写之者

訓読と脚注…右の史料について、理解の度合いを示すために、訓読ならびに備忘のために脚注を付した。十分な理解を果たせたかは心もとない。大方の御教示を願えば幸いである。

『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』

※卯月嶋山Ⅱ長福寺の山号。

※縁起Ⅱ寺社の創建の由来・功德などについての伝承や、またそれを書いた書物・絵巻物。

◆竊に以れば、夫れ當寺の濫觴は、人皇六十一代朱雀院の御宇、承平二壬辰年仲秋之天、照道上人始めて当郡篠部内歌鷲村に來り、一字の精舎を建立し、号して海尻山（かいこうさん）観音寺と称す。又大勢至菩薩の尊像を刻み、本

尊と為玉ふ。然るに是れ上人は元来無比の大願を発して、大勢至菩薩の形像三軀、手づから制して之を作し、日域朝中三箇処に安置し奉る。

※竊に以れば〓ひそかにおもんみれば。心をひそめてよくよく思いをめぐらしてみる。仏意に対して、へりくだる意をあらわす。

※濫觴〓らんしょう。物事の発端。

※仲秋之天〓仲秋の時候。

※承平二壬辰年〓ユリウス暦九三二年。

※勢至菩薩〓せいしぼさつ。阿弥陀如来の脇侍。観音菩薩は阿弥陀如来の慈悲の部門を受けもつのに対し、勢至菩薩は智恵の部門を受けもつ。

※日域朝中〓じちいきちようちゆう。日本の異称であり、この世界にあまねく、という意味。

◆一尊は陸奥国玉造郡（たまつくりぐん）船木の里に坐す。廼（すなわ）ち東曼荼羅、定門の利徳を表す。一尊は日向国白許郡村上山に在（いま）す。即ち西曼荼羅、恵門の智徳を顕す。一尊は但馬国美含郡（みくみぐん）歌鷺村に坐（いま）す。即ち両部不二の奥義、定・恵一致の密理を彰し玉ふ。

※陸奥国〓むつのくに。現在の福島県、宮城県、岩手県、青森県と秋田県の一部。

※日向国〓ひむかのくに。現在の宮崎県と鹿児島県の一部。

※但馬国Ⅱたじまのくに。現在の兵庫県北部。

※東曼荼羅Ⅱとうまんだら。金剛界曼荼羅が西方に配するのに対して、東方に配するところからいう。「たいどうかいまんだら（胎藏界曼荼羅）」の異称。

※両部不二Ⅱりようぶふに。胎藏界と金剛界とは理智不二の関係にあつて、本来一つのものであるということ。

◆今ま当寺の本尊是れ也。彼の三所亦た、横堅中台・密嚴国土、花美世界・法界宮、三部三密、理・智・事の三点、一々の功德等、恒沙も喩るに非ず、算数も計り難き者か。凡そ大勢至菩薩は、神力十方に遍く、悲願三世に亘り、頂上の光明を放つて、生死の長夜を照し、足下の神力を現して、菩薩の本都（もと）を示し玉ふ。所以に信願帰依の輩は、手を挙げずして仏性の蓮花を開き、恭敬供養の人は、足を運はずして諸仏の宝刹に遊ばん。加之、諸仏の行願を助成し、衆性の道心を勧進し玉ふ。此の菩薩の本誓、彼の大士の慈悲也。

※密嚴国土Ⅱみつごんこくど。大日如来のいる浄土。

※法界宮Ⅱほうかいぐう。大日如来の宮殿。

※三密Ⅱ身密、語密、意密という仏の行為のこと。

※理智事三点Ⅱ真言宗では、胎藏は理界、金剛界は智界、この2つを統合して「事」と捉える。

※恭敬供養Ⅱくぎようくよう。つつしみ敬つて心から供養すること。

※道心Ⅱ菩提を求める心。仏道を信奉する心。

◆<sup>こ</sup> 粵に承平二年より既に四百三十九の年歴を歴て後ち、人皇九十九代の帝<sup>みかと</sup>後光厳院、応安三年庚戌、明景<sup>けい</sup>の頃、此ノ浦沖に於て晝夜光り耀くこと百有余日也。尔れは乃ち近里遠方之を見、之を聴き、且つ奇<sup>あやし</sup>（あやし）且つ恐<sup>おそ</sup>る。或は相人を招て吉凶を筮<sup>ぜい</sup>し、或は学者を請じて是非を議すれども、共に識得すること能はず。中就<sup>な</sup>（なかんずく）、悪相と称するは繁多<sup>はん</sup>にして、吉瑞<sup>ずい</sup>と見る人は些<sup>せ</sup>少なり。

※後光厳院Ⅱ後光厳（ごこうごん）天皇。在位は観応三年（一三五二年）Ⅱ応安四年（一三七一年）

※応安三年Ⅱユリウス暦一三七〇年。

※明景Ⅱ秋。

※此の浦Ⅱ現香住の集落のこと。

※晝夜Ⅱ昼夜。

◆<sup>はん</sup> 然る處に、当郡竹野郷、<sup>さと</sup>蘭部浜ノ内切濱村の住人、濱太郎が妹に濱石女と云う者、卒然<sup>そつぜん</sup>として狂氣し、古郷を出奔<sup>しゅつぽん</sup>（しゅつぽん）して、此ノ里に徘徊<sup>はいはい</sup>す。既に両月に及ぶ。是の狂人尋常<sup>よのつね</sup>の狂者に異なり、久く食味を絶つと雖ども、遂に色を変ぜず。徒に言語を吐くに似て、敢て人を毀<sup>やぶる</sup>（そしる）こと無し。穢汚<sup>こうえ</sup>を惡<sup>にく</sup>んで濁室<sup>ちやくしつ</sup>に至ず。清浄を好んで荒薦<sup>あらこも</sup>に安座せり。

※当郡竹野里蘭部切浜Ⅱ現兵庫県豊岡市竹野町切濱。

◆或る時狂女、神託と称す。閭人<sup>りよ</sup>に告て曰く、我は廣峯牛頭天王なり。衆生を擁護<sup>ようご</sup>せんが為に來臨すと雖も、此里に凡夫愚昧にして、之を覺知せず、悲む可し悲む可し。項<sup>このころ</sup>数日、光を海上に放ては、偏へに（ひとえに）是れ吾が影向の光明也。

※閭人<sup>りよ</sup>よりよじん。むらびと。

※廣峯牛頭天王<sup>りよ</sup>兵庫県姫路市の広峰山山頂に鎮座する廣峯神社において、牛頭天王が祀られている。

※影向<sup>りよ</sup>ようごう。神仏の本体が一時応現すること。神仏が仮の姿をとって、この世に現われること。神仏が來臨すること。

◆今<sup>いま</sup>まさに吾<sup>われ</sup>躰<sup>み</sup>を、其の处在を知ら教むべき也と、一指を挙て、彼を示し玉ふ。即ち指さす方を見るに、果して御正躰、一面歴然として松の梢<sup>こずえ</sup>に掛れり。此の時諸人、疑ひを開き惑<sup>まどい</sup>を解き了はんぬ。肆（ここ）に即ち社を造て、神躰を納め、祀<sup>まつり</sup>を初めて、供物を備ふ。且つ復（また）、天王託して宣玉<sup>の</sup>はく、当郡森垣の住人、太輔阿闍梨、我祝部<sup>ほうり</sup>と為す可し。惣<sup>そう</sup>じて禰宜<sup>ねぎ</sup>・神主・神子に至るまで其の器<sup>えら</sup>を選び、其の職<sup>しやく</sup>に任し、祭祈を専らに宜<sup>よろし</sup>く也と云々。

※阿闍梨<sup>あじかり</sup>あじやり。僧侶の資格を持つ者。

※祝部<sup>ほうり</sup>ほうり。神道において神に奉仕する人の総称。また、神主・禰宜の次位にあつて神に仕える者。

◆それより以降、恒例の神事、闕<sup>かく</sup>こと無く、如在の禮典<sup>てんをこたら</sup>怠らず。特に年内一度の祀<sup>まつり</sup>は、近郷<sup>ごう</sup>の男女、雲の如く萃<sup>あつ</sup>ま

りて、崇敬遠境の緇素<sup>しそ</sup>、霧<sup>きり</sup>の如く合つて、以て譬仰<sup>せんがう</sup>す。是の故に、神は日々に威光を増し、人は時々利生<sup>りよう</sup>を得。随而(したがつて)牛頭天王は、世に曰う蠶養<sup>さん</sup>神に也りと。既にして(すでにして)天王御影向より四十三年の後、応永十九年壬辰卯月八日に、歌鷺村より一日市邑に引き越し、海尻山観音寺を改めて卯月嶋山長福寺と号す。

※緇素〓しそ。僧俗のこと。

※応永十九年〓ユリウス暦一四一二年。

◆此の時の院主は、覚成法印、即ち前の神託の祝部<sup>ほうり</sup>是れ也。茲に(ここに)覚成、伽羅修宮の志有て、良材を求めし欲るの処に、幸い或<sup>なるかな</sup>、同年九月二十廿四日、戌の刻に漢土<sup>かん</sup>の大船、風波に漂随<sup>ひやうた</sup>せられて、此ノ浦に流れ寄れり。遂に即ち彼の船の道具<sup>もつ</sup>を用て、此堂の材木に充つ<sup>あ</sup>、次より又、一の塔姿を造立せんと欲るの節。同き(ひとしき)年号廿五年八月廿六日、賊風頻<sup>しやうふうしきり</sup>に吹き驚汰遽<sup>けいたにむかたつ</sup>に起て、北国の樽船<sup>くれふね</sup>、破損<sup>はそん</sup>に及び此ノ浜に寄れり。彼の樽を以て塔を葺<sup>ふ</sup>き畢ぬ。右大願主の長左兵衛尉(ちよさひようえのじよう)、長谷部信連九代の後胤<sup>いん</sup>、加賀の守、忠連道号傑叟<sup>けつそう</sup>、法名宗俊也。堂塔寺院に至るまで、功近<sup>こうしやう</sup>の棟梁と為して、造功の成就<sup>とけ</sup>を遂し者<sup>もの</sup>、石津邑吉田と云う工人也。

※樽〓くれ。皮の付いたままでの丸太。

※後胤〓こういん。子孫。後裔。

◆堂塔供養は同き(ひとしき)年号廿六年七月二十四日に之修す也。舞樂曼荼羅供、職衆十二口、長福寺・法花寺・糸谷寺・長谷寺・観音寺・宗光院・宝蔵坊・大蔵坊・南之坊・奈本坊・西谷坊・東之坊也。此の時の導師は覚成法印也と仰云々。当寺の縁起、先德之を記するに、直に其<sup>あた</sup>の言<sup>こと</sup>の実を取り、姑<sup>しはら</sup>く其<sup>こと</sup>の詞<sup>ことば</sup>の花を捨つ。予(われ)今ま雖も、

之を書を改むと、頗る右記に准して（ゆるして）、文の玉藻を好むに非ず、字の秀逸を執こと無きのみ。

※舞樂曼荼羅供Ⅱぶがくまんだらく。仏教儀式の一種。

※職衆Ⅱしきしゅう。仏教儀礼での職務を担当する僧侶の集団。

※先徳Ⅱ前代の有徳の僧。

◆歳次甲午天保伍星八月吉日良辰 謹言

真言陀尼宗 祐海快道 行年廿四才

於棕橋山遍照密室、書写之者

※天保五年…ユリウス暦一八三四年。十二支では甲午。

※良辰Ⅱ吉日。吉旦も同様の意。

※棕橋山遍照密室Ⅱ棕橋（くらはし）総社は、大阪府豊中市庄本町に鎮座する神社。

## 付記

本文にも紹介した『天王御影向縁起（長福寺所蔵）』の意識については、八坂神社の夏祭りにおいて、地域の方々に縁起の概要をお伝えするのに有益とすることで、令和五年七月、八坂神社の神主である濱本浩久氏へ提供させて頂いた。また、本研究で入手した『但馬美含郡卯月嶋山長福寺縁起』の卷子本については、本稿の出版後、八坂神社へ寄贈する。